



生きものいっぱい
八幡川河口干潟

河口は、かきりなく海に近いので、潮の干満の影響を大きく受けます。潮が満ちるときは海水で満たされ、潮が引くと陸地が現れます。しかし、河口の水は、塩水と真水とが混じり合うので、濃さのちがいがあがります。干潟の泥や砂のなかで暮らす生き物たちは、はいりぬったり、河を渡ったりして常に泥沙をかき混ぜます。こうしてできたたくさんの溝を水が行き来するので、干潟はきれいにきれいになっていきます。これを物理的浄化といいますが、また、生きものは水のなかの栄養をこしとる、泥を食べて有機物を取り込む、その有機物を分解するなどして、干潟をきれいに保ちます。これを生物学的浄化といいますが、その浄化能力は、人間が行った干潟復元活動をはるかに上回ると思われています。

干潟を埋め立てたり、なくしたりしてしまうと、多くの生き物たちは生きていけなくなり、これらの作用はたかたかなくなってしまいます。そして、一度なくなった干潟は簡単にはもとに戻りません。

干潟は、遠い昔から、いろいろな生き物がつながりあって生きてきた、とても素晴らしい大切な場所なのです。

干潟に出るねむと準備するもの★注意

生き物観察しよう!

上手な干潟観察のしかた
・観察できるには、必ず準備のものが一通り揃えましょう。

- ① 観察者の口のまわりの髪を剃り、衣類等の準備も忘れずに行いましょう。
- ② 観察した生き物を観察者も入る靴や、バーナーがある靴を履き、
- ③ 足は準備した靴をつけて、靴子をかき取り、靴を履きかき取り、
- ④ 準備した、カゴやバケツなどを持ち、カゴやバケツに生き物をいれ、カゴやバケツをきれいにする。
- ⑤ 観察した生き物は観察者が扱った、その場所から持ち出す。

佐伯区ふるさと文庫 吉見園公民館事業「八幡川干潟探検隊」
発行/平成19年3月 広島市佐伯区役所・吉見園公民館
編集委員(フィッシュイーター)
船尾千絵 石井 健 岡田 勲 川本 通 染井真吾 田中由美子
橋本弘子 畑 久美
写真提供(鳥類) 今井義典

●ヨシ原のようす
真潟などに広く広がる大型多脚類のヨシ原は、鳥や蟹を伸ばして増え、とりわけ河川が広がる河口近くでは大群生します。家畜排水に含まれるリン分などの汚物を吸収し、水の浄化に役立つことでも知られています。また、小動物のすみかになり、多くの生き物たちの暮らしと深くかかわっています。

本数:1㎡あたり約200本 高さ:1〜数メートル、3m



●カニと砂ダンゴ
干潟には、たくさんの種類のカニがすんでいます。私たち干潟探検隊は、八幡川の干潟で15種類のカニを見つけてきました。そのほとんどは干潟で暮らしています。カニたちは種類によって、すみ場所やエサなどを食べ、すみ分けています。家のまわりに移ダンゴを作るものもありますが、その大きさは種類によってさまざまです。コマツネガニやチゴガニなどは、砂の中の「クイック」と呼ばれる植物プランクトンを砂と一緒に食べ、砂だけをダンゴ状にして吐き出します。砂ダンゴは、潮が引いている間、尻尾から出てきたカニたちが食事をした跡なのです。カニたちは食料などいつも探しているもので、とても警戒心が強く、人間などが近づくとすぐに奥穴の中へ逃げ込みますが、じっとしているときまた外に出てきてエサを食べはじめます。おどかさないうようにそっと観察しましょう。



●干潟と鳥たち
地球上の多くの鳥たちは、暮らしやすい環境を求めて季節が変わるたびに旅をします。中には何千里も移動する鳥もいます。鳥たちは旅の途中で羽を休め、食事をとって体力を回復し、再び高い羽を飛ばします。このような鳥たちにとって、エサになるたくさんの生き物がすむ干潟は、高速道路にあるサービスエリアのような場所です。干潟がなくなってしまうと旅を続けることができません。毎年春と秋には、シギやチドリの種類が増えてきます。かれらが河川いっぱい広がって、引き寄せられるエサのカニやゴカイなどによっている光景が見られます。コアシサシも華麗な航空ショーやダイビングを見せられます。観察のため、八幡川河口干潟探検隊の皆さんはたくさん観察しましたが、草が生えて砂礫地が少なくなるにつれて、見かける数も減ってきました。



●マメコブシガニのユニークな暮らし
その名のとおり、にぎりこぶしのような平らな殻を持ったマメコブシガニは泳いで暮らしています。水の中では浮力があるので、葉が長く細くかよい泳いで移動することもできます。ハサエビは大きく重いため、水から出る前におのめようとして歩きます。鳥類を感じると、あつという音に砂の中に隠りますが、そんなおもしろい鳴き声は、砂を丸めておのめよう干潟の水の流れる中を泳ぎ回ります。初夏の繁殖期にはオスは仲間に出会うとすぐに卵をつけます。オスの腹の中に卵を産みつけ、産みつけた卵がオスの腹の中に入ると気づいて隠れていきます。交尾のあと他のオスにメスが奪われぬよう長いハサエビ足でメスを抱きかかえます。種歩きで岸から岸まで逃げたり、尻尾を伸ばして逃げ込んだりする普通の方には比べ、マメコブシガニはこのようにユニークな暮らし方をしています。

●カニ・エビ・ヤドリカサ・フジツボ
エビやカニやヤドリカサの仲間には、ひとつの脚に一對のあしをもつ、ムカデのような形をしていました。やがてからだの部分が短くなりアゴになったエビ(真尾蟹)、まん甲から前りたまたまになったカニ(真尾蟹)、おなかの部分がのびてきたヤドリカサ(真尾蟹)、とそれぞれ形を変えていきました。背骨を硬くした生き物に比べて、甲殻は、おがわの固い殻で体を守りたり支えたりしたため、大型化することはできませんでした。フジツボ(真尾蟹)も、エビやカニなどに近いグループで、カメノテなどもこの仲間です。フジツボの仲間には硬い殻ですが、同じ種類のフジツボと交尾をするため、成長のうちに甲殻を求めて移動し寄り集まって生活します。

環境をこえる生き物たち
大型船は、バラストをとるために、船底にバラストをためる海水を船中で取り、岸に多くをこめて海を捨て、かわりに底層をのぞきます。この時、海の生き物が一緒に運ばれ、他の国の海で生活を始めることがあります。日本でも、ヨーロッパ、アジア、アメリカ、オーストラリアなどの国々から、さまざまな種類の生き物がバラストと一緒に運ばれてきています。

●ひろしま川と子どもの交流サミット
ひろしまの川をテーマとして活動している子どもたちが、広島少年自然の集まり交流サミットを行いました。そこでは、いくつかの公民館から、それぞれの川で調査したこと、発見したことを発表し合い、議論を行いました。

